

窃盗被疑事件  
被疑者 ○○○○

## 勾留請求しないように求める意見書

令和○年○月○日

福岡地方検察庁 ○○検察官 殿

弁護士 福岡 九州男

### 意 見 の 趣 旨

上記被疑者に対する窃盗被疑事件について、勾留請求しないように求める。

### 意 見 の 理 由

#### 第1 被疑事実の概要

本件は、少年である被疑者が、令和元年○月○日午後5時18分頃、福岡市博多区内にある書店（以下、「本件書店」という。）において、共犯者とともにコミック19点を窃取したという窃盗被疑事件の事案である（以下、「本件被疑事実」という。）。

本件においては、刑事訴訟法60条各号規定の勾留の理由はなく、かつ、勾留の必要性も存在しない。

また、本件は、検察官が勾留請求をする「やむを得ない場合」（少年法43条3項）には該当せず、裁判官が少年に対して勾留状を発布すべき「やむを得ない場合」（少年法48条1項）にも該当しない。

したがって、弁護士としては、検察官に対して勾留請求しないように求めるものである。

以下詳細な理由を述べる。

#### 第2 勾留の理由がないこと

##### 1 刑事訴訟法60条1号事由に該当しないこと

被疑者は、福岡市内において定まった住所を有しており、同法60条1号に該当しないことは明らかである。

##### 2 刑事訴訟法60条2号事由に該当しないこと

###### (1) 罪証隠滅の対象

本件は、被疑者が、同日4時半ころ、本件書店においてコミック本を立ち読みしていた際に、共犯者より、コミック本を持ってついてくるように言われたため、本件書店の外に出たところで本件書店の警備員に声掛けされたという事案である。

したがって、罪体に関しては、本件書店の被害届、本件書店に設置された防犯カメラ映像、現場の実況見分調書、本件書店の警備員の供述、共犯者供述、被疑者の供述などが中心的な証拠になるものと考えられる。

(2) 罪証隠滅の現実的可能性

本件では、既に被害届は提出されており、防犯カメラ映像、現場の実況見分調書などの客観的証拠については、すでに捜査機関において証拠保全が完了しているものと思われ、これらについて罪証隠滅することは現実的に困難である。

そのため、本件において、現実的に罪証隠滅の対象となりうる対象は、本件書店警備員の供述および共犯者の供述である。

しかし、被疑者は本件書店警備員との面識はなく、かつ、捜査機関によって本件書店警備員の本件被疑事実に関する供述は録取されているため、被疑者が本件書店警備員に働きかけを行い、供述を変遷させることは困難である。また、被疑者が、共犯者との間で口裏合わせを行う可能性はあるものの、被疑者と共犯者は、本件犯行後、警察から任意の取調べを受けた際に、本件犯行を認める旨の供述調書を作成しており、今後、被疑者が共犯者と供述を合わせて証拠隠滅を図ることも客観的に困難である。

(3) 被疑者の誓約書及びの被疑者の母親の身元引受書

被疑者は、上記住所において、両親とともに生活をしているところ、被疑者の母親は、被疑者に対して罪証隠滅行為をさせない旨誓約している（添付資料1, 2, 3）。

また、被疑者も証拠隠滅行為に及ばない旨誓約している（添付資料4）。

(4) 結論

以上、本件に関する罪証隠滅の現実的可能性は存在せず、かつ、主観的可能性もないことから、本件には刑事訴訟法60条2号事由が存在しない。

3 刑事訴訟法60条3号事由に該当しないこと

(1) 被疑者は、両親や妹・弟とともに同居して生活しており、安定した生活を送っているところ、学校生活においても、中学校に欠かさず通学しており、その学習態度は真面目で良好であり、部活動にも精力的に活動していた（添付資料1）。

(2) また、被疑者は、本件犯行後に、現行犯逮捕されることなく帰宅しているところ、その後に行われた警察における取調べにも応じており、逃亡の素振りはない。

(3) さらに、被疑者の母親が被疑者の身元を引き受けて、警察の取調べ等に出頭させ、被疑者に逃亡したり、逃亡すると疑われるような行為は一切させない旨を誓約しており、被疑者自身もこれらの行為に及ばない旨を誓約している（添付資料1, 2, 3）。

(4) したがって、被疑者が、これらの安定した生活を顧みずに逃走に及ぶことなどおよそ考え難い。

よって、本件は刑訴法60条3号事由に該当しない。

4 小括

以上、本件において勾留の理由がないことは明らかである。

第3 勾留の必要性のないこと

1 仮に、本件被疑事実について勾留の理由が認められたとしても、本件では以

下の通り、勾留の必要性を欠くため、被疑者に対する勾留は認められない。

2 逃亡のおそれ及び罪証隠滅のおそれが低いこと

本件において、刑訴法60条各号の事由がないことは既に述べた通りであるが、仮にこれが認められたとしても、逃亡のおそれについても罪証隠滅のおそれについても、その可能性は極めて低いものである。

3 被疑者が高校受験を控えていること

被疑者は、中学校を卒業後、高校に進学を予定しているところ、令和〇年2月〇日、学校法人〇〇〇〇高等学校を受験する予定である（添付資料1，5）。

そのため、被疑者が本件に関して勾留された場合、被疑者は高校受験の機会を失うことになる。確かに、被疑者を勾留したうえで、受験日のみ勾留の執行停止を行うことも考えられるが、それまでに被疑者は受験勉強等の準備も必要である。

したがって、本件に関して被疑者を勾留することは、被疑者の将来に対して著しい悪影響を及ぼすこととなる。

以上のことからすれば、罪証隠滅や逃亡のおそれの現実的な可能性を踏まえたとしても、本件において被疑者を勾留することによって受ける不利益は著しく大きいといえる。

したがって、本件において被疑者を勾留する必要性はない。

第4 「やむを得ない理由」（少年法43条3項）

被疑者は、本件当時15歳であり、成人同様の留置施設に勾留することは、心身に著しい悪影響を与えるうえ、勾留によらなければ捜査の遂行上、重大な支障があるとも言えない。

そのため、本件では、被疑者を勾留するやむを得ない理由があるとはいえない。

第5 結論

1 以上、本件では、罪を犯したことを疑うに足る相当な理由がなく、また勾留の理由、必要性ともに認められないし、被疑者に対して勾留状を發布すべきやむを得ない場合にもあたらない。

よって、検察官におかれては、被疑者について勾留請求することなく、速やかに被疑者を釈放の上在宅での捜査に切り替えるよう求めるものである。

2 仮に、身体拘束がなされる場合でも、勾留ではなく勾留に代わる観護措置が選択されるべき筋合いである。また、仮に勾留がなされる場合であっても、勾留場所は警察署ではなく少年鑑別所とすべきものである。

以 上

添付資料

- 資料1 陳述書（被疑者の母）
- 資料2 身元引受書（被疑者の母）
- 資料3 自動車免許証（被疑者の母）
- 資料4 誓約書（被疑者）
- 資料5 受験票